

## 2. 奥美濃-五箇山-砺波平野 花街道

1999. 4. 30.



- 2.1. 奥美濃ひるがの湿原・水芭蕉 [hrgn.htm](#)
- 2.2. 砺波平野にひろがる散居村 [snsn.htm](#)
- 2.3. 彫刻の街 「井波」 [inami.htm](#)
- 2.4. チューリップ祭りの砺波 [tnmi.htm](#)

ゴールデン ウィークがやって来た。今年は何年ぶりかでゆっくり出来ました。

弘前は桜の季節・三内丸山へ行こう考えましたが飛行機なく断念。 鹿児島韓国岳も。

『もう何年もいっていないが、この季節富山はチューリップ・水芭蕉の季節。 久しぶりに雪の山も見たい。』 越中八尾の風の盆以来。 ふっと思いついて家内と二人富山へ出かけました。

奥美濃白山山麓から五箇山を抜けて富山砺波へ行き、10年ぶりに彫刻の町「井波」で若い彫刻家の2代目達に刺激を受けて帰りました。

6月には久住ミヤマキリシマ見に行きたいしまだ 色々やりたいことばかりです。

1999. 4. 30 中西 睦夫



奥美濃 蛭ヶ野湿原



砺波平野の散居村



彫刻の街 井波



チューリップ祭の砺波



奥美濃

## 2.1. ひるがの湿原

水芭蕉

hrgn.htm

1999. 4. 30.



奥美濃 白山・大日岳を背景にひるが野湿原 1999.4.30.

岐阜県の最奥富山県との県境に接して、白山奥美濃側大日岳の山麓にひろがるひるが野高原。  
本当に雪が深く、中々入れないところ。

美濃白鳥・白山の冬の登山基地石徹白など一度是非通ってみたい美濃から五箇山から富山への道であった。また、この街道は 最近はバスの車掌さんが生涯かけて沿道に桜の若木を植えつづけ「桜街道」と呼ばれようになった。

白山の分水嶺により接続を阻まれた JR 越美南線と越美北線。

今は 東海・北陸自動車道が尾張一宮から美濃白鳥まで開通しており、まもなく山を越え砺波平野へと工事が進んでいる。

かつて閉ざされた土地もいまは高速道路とスキー場で活気のある町に変貌していた。

白鳥の街を抜け、石徹白を通り、五箇山の方へ白山山麓を少し登りつつ 山の中に入ると突然広い高原に出た。それがひるがの高原。

白い雪を戴いた大日岳を背に山々に囲まれた雄大な湿原と草原が広がっている。



大日岳を背に広がる 奥美濃 ひるが野湿原 1999.4.30.



天気も上々、久しぶりに、自然の空気を満喫。

聞いてはいたが、水芭蕉だけでなく本当に気持ちの良い高原でした。

高原の中をドライブウエーが走るが、平日であったことがラッキー

ひるがの湿原は乾燥化が進んで尾瀬ヶ原とは少し違ったおもむきでしたが、水芭蕉の

群落が大日岳を背に湿原のせせらぎに白い花をいっぱいつけていた。



# ひるがの湿原探訪 file



## ● 奥美濃街道 小牧ダム周辺で



## 2.2. 砺波平野の散村(散居村)

sansn.htm 1999. 4. 30 by M. Nakanishi



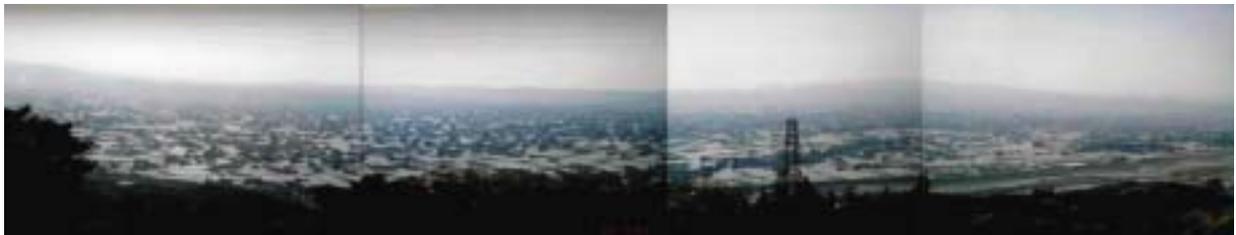
庄川沿いに五箇山の奥深い幾重もの山また山を抜け、ぱっと砺波平野がひらけると眼前にこの散居村の風景が広がる。

家と家の間の田圃には田植えの水がはられ、鏡のごとく光っている。

庄川沿いに砺波平野へ入り、彫刻の町「井波」のすぐ東側の山の散居村展望地に登った。

10年ぶりで時期も同じ5月連休。

少しは残っていても もう この景色は見られないものと思っていましたが、本当に昔のままで眼前に広がっていました。家内ははじめて見る風景に感激。



展望台からの眼下の砺波平野に広がる散居村風景

眼下の庄川の流れに沿って、光に映える水の中に無数の船が浮かんでいるように見える。

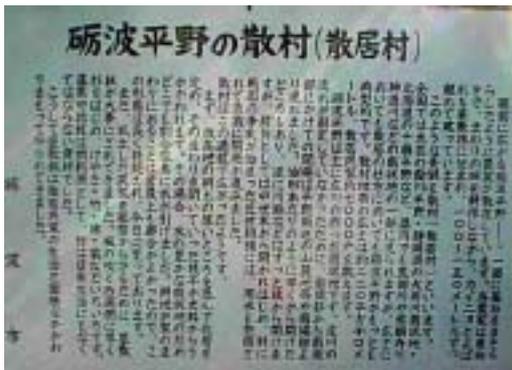
案内板には約700の住居と書いてあったが、ちょうど シンガポールへ飛行機が下りる直前に見えるマラッカ海峡の船がこんな風である。

遠くには富山湾がかすみ、東には富山市がそして立山・剣の連山が白い峯を輝かせ左西方には今日越えてきた五箇山・白山の山々見える。

誰もいない山の上でしばし 家内と二人 この光景に見とれていた。

1999. 4.30. 午後 富山県砺波にて

## 砺波平野の散村 の 由来



一面に基石をまきちらしたように農家が散在しています。

各家は東向きで、まわりの田を耕しながら、カイニョと呼ばれる屋敷林に生まれ、100～150メートルずつ離れて建っています。このような景観を散居村といいます。



庄川の流れが固定していなかったために、扇頂部から扇中部にかけての開発は平野周辺の山麓地帯扇端部より遅れました。

趨勢としては中世末から開かれはじめ、特に戦国の争乱が治まった近世初頭には、用水も整備されて急激に開発が進みました。散村はこの過程で広がったようです。

全国では出雲平野の簸川平野・静岡県大井川扇状地・北海道の十勝平野など、県内でも黒部川や常願寺川・神通川などの扇状地の一部に見られますが、広さにおいて散居の仕方においても砺波平野がもっとも典型的で、散居地帯の広さは約220平方キロメートル、散居民家約7000戸を数えます。

砺波平野は主に庄川の作った扇状地です。



まず、微高地の耕土の厚いところを選んで住居を定め、そのまわりを開いていった様子が史料からうかがわれます。

その場合、水の豊かな扇状地のためどこでも割合用意に水が引げました。

耕地が家のまわりにあることは営農上都合よかったので、この形態は長く持続され、今日に至っております。

また、孤立した家を風雪から守るために、屋敷林が大事にされてきました。風の吹く西南側に厚く杉をはじめ、げやき・竹・柿・栗などいろいろです。落葉や枯枝は燃料として、竹は日常生活にもなくてはならない資材でした。

こうして屋敷林は散居民家の生活と密接なかかわりをもって守られてきました。

## 2.3. 欄間彫刻の街 『井波』

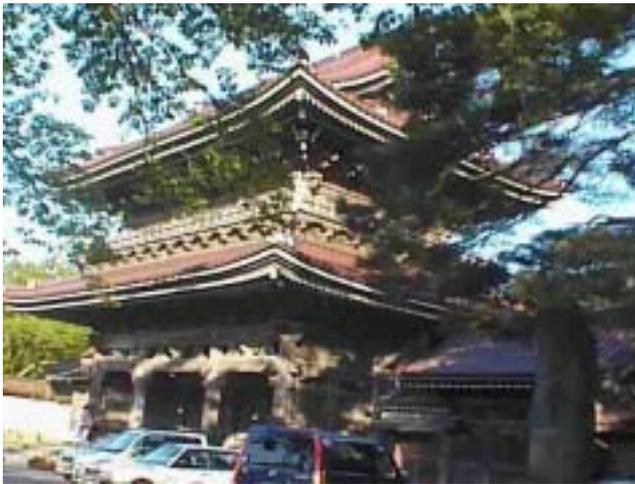


inmi.htm

1999. 4. 30 by M.nakanishi

井波町の人口は、1万1千人ほどです。この町は、浄土真宗の瑞泉寺の門前町として発展し平成2年に開町600年を祝いました。

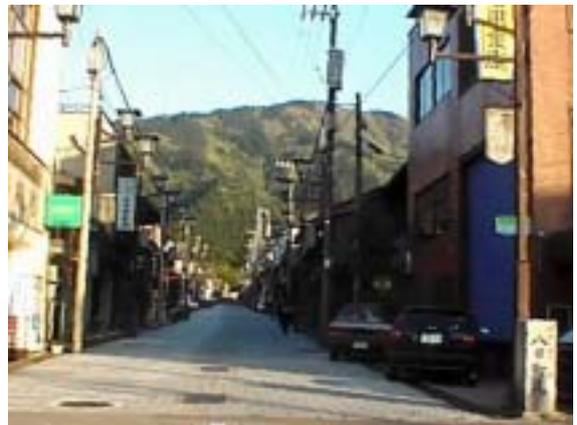
町の特徴は、日本最大の木彫刻の集積（井波彫刻）があることです。約300人の彫刻師が、彫刻に従事しています。まさに 木彫刻の街です。



浄土真宗 瑞泉寺山門と山門彫刻

静かなたたずまいの古い家並み、人影は見えないが石畳がきっちり敷かれたゆるやかな坂道の両側に並んだ家々から木槌の音が心地よく響き、木の香りがほのかにただよってきます。

10年前に訪れた時とまったく変わっていない。とにかく槌音以外に時たま通る車の音以外落ち着いた家並みの中は静まり返った午後で、なんとなく懐かしさにほっとしました。



井波 瑞泉寺 門前街



井波 欄間彫刻の店の中で

前に訪問した時には 油の乗り切った彫刻師たちが大きな欄間彫刻に腕を振るい、その見事さにビックリしましたが、10年たって家々では 2代目が新しいデザインの彫刻に腕を振っている。

親父さんと 2代目が並んで槌を振っている家もある。

とにかく若い彫刻師が多いのにビックリする。

伝統的地場産業と言うとイメージ的には年老いた匠が後継者もなく「ほそぼそと伝統を守っている」の感が強いが、井波は違っている。

ひっそりと静まり返った瑞泉寺の門前の家並みの中で、若い人達が、新しいデザインの数々の作品に取り組んでいるのに感動を覚える。

家内はくすの木の香りに引かれ、若い彫刻師が木槌を振っている一軒に飛び込んで話込んでいる。楠の削りくずが小袋に入れられ、「どうぞ お持ち下さい」と書かれて店の端に置かれている。良く知らなかったが、天然の防腐剤だそうだ。

家内は喜んでしまって 買った小さな「きうす」の敷き台と一緒に、このクスの削りくずを大事に掴んでいる。

## ● 井波 彫刻の町 八日市通りで



この井波は彫刻の伝統を受け継ぐ若い後継者が育っている。

以前なかった井波彫刻総合会館の中の作品も新しいデザインの色々な飾り彫刻や装身具彫刻などが、伝統の欄間彫刻や獅子頭の彫刻にまじって展示され、新しい伝統がそだっていることを感じる。

訪問するのが閉館ぎりぎり「もうだめかな」と思いながら飛び込んだのに閉館時間を延ばしゆっくり見せていただいた受け付けのお嬢さん。

前に来た時に見た丸いバス ストップの駅名看板 木製で十二支彫刻が彫られていたが、今も健在であった。

ほんとうに ほっとして、うれしくなった井波でのひとときでした。また来ようと思う。

1999年 4月 30日 夕  
瑞泉寺の石段から彫刻の街並み「八日町通り」を眺めながら

### ● 井波彫刻総合会館



### ● 井波 瑞泉寺 山門の飾り彫刻





井波彫刻の歴史は、宝歴12年（1762年）に焼失した瑞泉寺再建の際に、京都本願寺の御用彫刻師が井波へきて、地元大工に技法を伝えたのが始まりといわれています。

時の流れとともに神社、仏閣、曳山等の彫刻から、民家の室内彫刻へと移り変わり、現在では欄間を中心に獅子頭、天神様、置物、パネル、衝立等と製品の幅を広げて発展してきました

井波彫刻は、楠、ケヤキ、桐等を材料として、荒彫りから仕上げ彫りまで200本以上のノミ、彫刻刀を巧みに使い分け、高度な技術を駆使して格調の高い作品を作っています。

主製品の欄間の製作では2枚一組で彫り上げるまでに2カ月～3カ月、手の込んだものになると6カ月以上もかけて仕上げられているそうです

また、一方で井波は作家の町ともいわれています。

井波町を中心に周辺市町に住む彫刻師は300人を超えます。

この中には、日展等の入選者約80人をはじめ、有名作家も多く、美術工芸品としての評価も高いのが特徴です。

この特色ある井波彫刻に魅せられて、全国各地から次々と若者達が名工の下に入門し、井波木彫刻工芸高等職業訓練校で厳しい試練に堪え、技能習得に励んでいます。

井波町 観光パンフレットより

## ● 彫刻の街「井波」 file

木彫刻の街瑞泉寺門前八日町通り



## 2. 4. チューリップ祭の砺波

1999. 4. 30

tnmi.htm



\$\$ 砺波のチューリップ祭 \$\$

[ 花 言 葉 ]

「博愛」	(全体)
「恋の告白」	(赤色)
「希望のない恋」	(黄色)
「魅惑」	(まだら)



チューリップが一杯咲いている時に行ってみたい街 『砺波』  
念願がかなって チューリップ祭の開かれている砺波に  
てきました。

子供が最初に描く花、最初に覚える歌、  
富山県の花にも指定されている花。  
そんな身近な花がチューリップを見たくて『砺波』に行っ  
てきました。

ほんとに色鮮やかなチューリップの数々をみてきましたよ。



子供が最初に描く花、最初に覚える歌、 富山県の花にも指定されている花。そんな身近な花がチュ

ーリップです。

- 原産地とその普及

現在世界に通用するチューリップの品種数は約 5000 種。そのチューリップの原産地はアフガニスタン。

それがトルコで品種改良を重ね、現在のものに近いものができ、オランダでさらに発展しました。

日本へは 1863 年フランスからヒアシンスと共にもたらされ、富山県では 1918 年東砺波郡庄下村（現砺波市）の水野豊造氏が栽培を試みました。

- 富山（砺波）でのチューリップ栽培

砺波は砂質土壌の庄川扇状地は水はけがよく、また冬の積雪が地中の温湿度を一定に保ち、外界の気象条件の変化から球根を守り、球根発育肥大時の 4 月下旬から 5 月にかけて日照時間が長いなど自然条件に恵まれ、それがチューリップ栽培に適し、チューリップの一大生産地に発展しました。

- チューリップの品種の数々

チューリップの品種は、開花期や花形、草姿により、原種を含めて 15 の系統に分類されています。

砺波のチューリップが『砺波市 ホームページ 』 に整理されていました。

色鮮やかなチューリップの数々。このページの写真と一緒に楽しんでください。

<http://www.city.tonami.toyama.jp/hana/tulip/tulip2.html>

〔砺波市 ホームページ より 〕

## 『 チューリップ公園 チューリップ祭 』 file





奥美濃-五箇山-砺波 花街道  
【完】